春の曙草紙五編

閑 芳川春潮
編者 閑水起泉
画工 揚州周延

澤村田之助曙草紙

五編上

A497
5上

曙草紙第五編序

素人眼の素きにより後にこれ
繪入草冊子を黒表紙に
黒きに換て俳優に係を下し
口に樂屋を刻べて素藤を穿ち
其黒白を判つとはいなが徐ど近世の俳優ハ人名あり
近世の女形ハ男子なり故ニ人心を感動なきしめ世上の喝采
を博する事能ハ俳優ハ冥く靡物と称して人を化せしに
鍾磨すべし女形ハ冥愛墨丸のある様忘れて男に惚るほどの
精神を持つべし其鍾磨と精神を持てる者ハ奇の舞妓道深けて

より唯深村田之助一人あるに前に踏考杜若の名人ありしも事で
田の助に於ける又其勇壮なる浪華乃寒川延三郎この盲
目を舞臺を勤めしを未曾有に事と賞されど田之助が死
常の不具にて屢々妙技を演ぜしをいえば奇を稱するに足ら
ず故に田之助等に田の助なし田之助後に田の助なしといふ
誰か半夏紙投迎者なるん依て其功名を不朽に傳えん
がなれ餘計なるをさへ編中に書加へしハまた具頁の
引例しと以ハまくのみ

明治十三年十一月

芳川春濤題

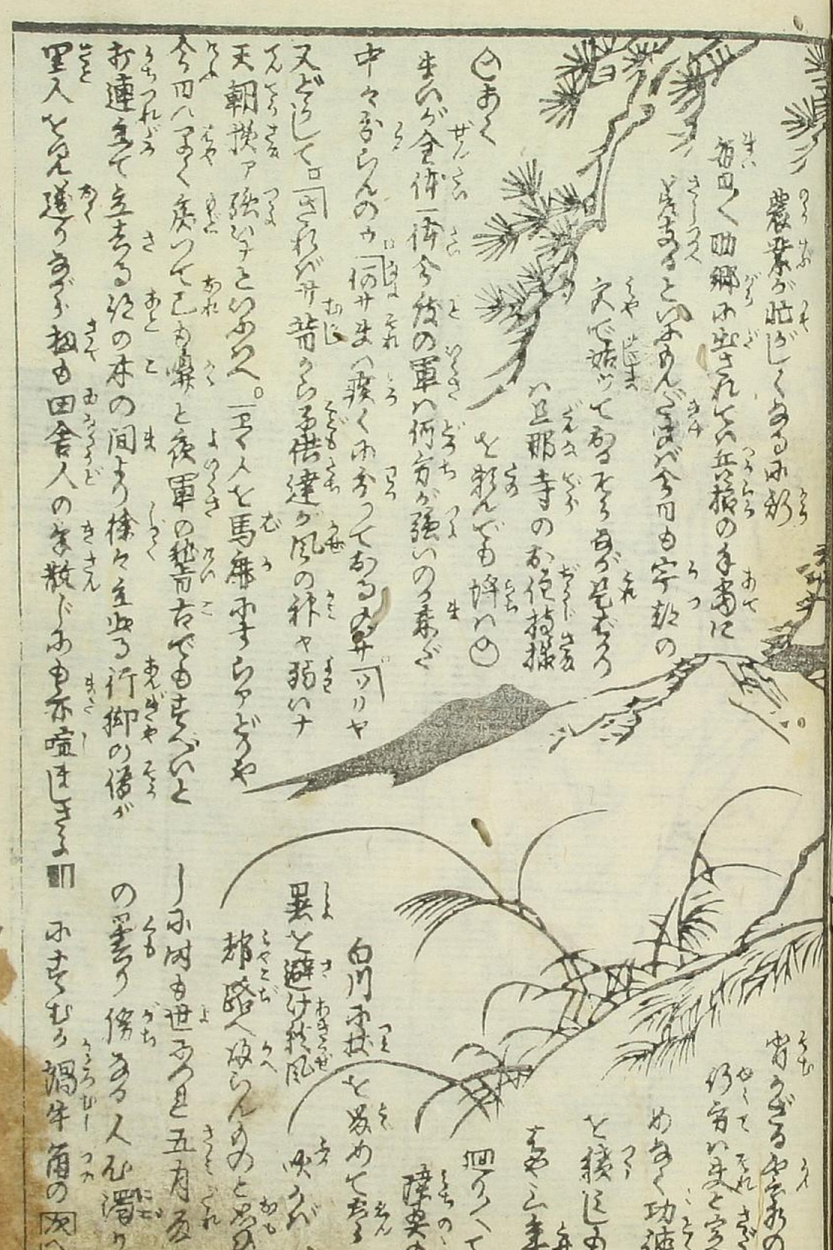
明治十一年七月七日午前四時歿 行年三十四歲

深廣院照與言成務 居士

三代目澤村田之助 家号紀伊國屋 俳名曙山

田之助一子
由次郎
相政のお貞
後々田之助妻
おくに

■我定者なる樹の本の仮麻の髪を鷲は一夜まに付て
も今の此に今日も
宇都の矢に戦
来ありとうアナ
滅ましの世
の有様我ハ先
年安射庶の
情に犯る命
を生きて厭離穢
ゑと昔を悔ゐ儀を
去りて清志と名に



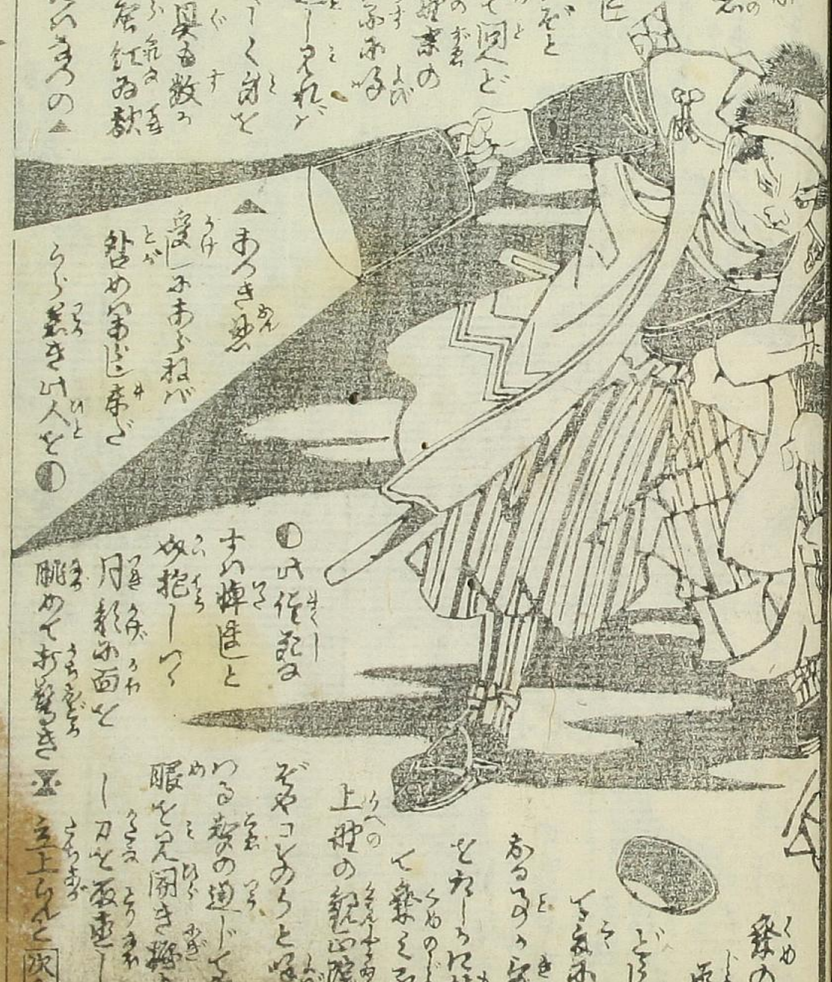
つぎ
車ひ解やすで

☒
夫ハ
東郡の
比敵と呼ぶ
生霊場も
修羅の衛と
変りし由昔の
事のものなれで
変し紀あるりしも
迄と再び革魅を
結び帰で途よりも
△
△
幸宇郡の夫へ残り
ある彼の又吉が妻君
を問んと郡へ来りし
事ものよりや軍がある
ものせよ出家に
※
※祟りの
ある筈
迄帰で
なぶらに両
軍の死者の筈
捉を修せるも功徳と猶り兵敗き
杖を曳きつゝ歩を出しハ年の初
次へ

「つぎ」かり」沢めて着も
踏くて途も進ま
ぜ体とくて潮と
ホ六七里字都の宮ホ
程をき神中ホかり宮」
国へ宝田由蕃
七物数ある
幼る濁世の泥
吸る風い
ち
手草ホ豹
布す緑しきれホ・
使りそれて宝き
駆きを学給ホぐ

ヤ、急ハ
武将

御一の草蔵ホ
側ぶそ呻く去
あるゆそ越い
痛ひに候さ」
路ゆ人ら驚れそと
蔭の中へ踏入て周と
会ひ親あく聖寺の
曳の門ホ寺の扱ふホる
生きがく起ーされ
戦士う甲冑ぐく
固め給る前の関を数の
前の宝働ホ居紅ね数
も乗宝も抵ひまろの▲



▲あろき処
度」ホあら私ば
給めの宝」
ら急き人を●

●ハ作者
すの神通と
吹抱ーつ
月新ホ面そ
驚めてお急き▲

立上らんと次へ

つぎ　さるを　なめて
ヤヨ　殺さぬ　様に　頼い
まく　立ちのく　親切
晩を　見届けう　再び
云わぬが　身の　為ニ　而
白波の　仮初　浮き
沙汰と　恨で　憂世　離い
的面の　ごきる　武士なれ
入旦　ぬすも　なさだに
代を　備通も　好命
あるのに　不便の　不仕
此　義理の　死を　免されて　来い
是迄　面向を　新しまうと

清

①　逃らんと　抑ゑ　結び
一　組を　解て　我肌
おつけ　脱
足　刀で
突　射字　袋を
刺通し　切取り　既に
水取
め　御〳〵
の　窓き　水油
乾　殺を
引　入る
うち　表を　掩
ひて　本の　様を　繕ふ

いのさん声の
うら　拍て
暇　あるそえ
お関東　頃
せんば　咲那と　騒て
いる　合るる　あ
う　去年カツクリ
まで　祈む　孫
一つ　持さふ　哀也
僧の　浅茅が
宝の　手涙の
袖　衣　袈裟
被と　被りつ
唱る　念仏を

千客万来

あのよ　冥途へ

代りの　木に　樹
て　表題ろか
回向一　経り　薙
撰分け　供選へ
立出る
村松町
を　振照

二人

の
云ふ士が　不審を　場を
とり　捕へ　已と　云
く　捉もあらの　次へ

つゞき
閑者でおらう姿をいつかやつも共
手をいれ皆ぬ安軍の肩にひらめく
綿の印を知らないか
トコとんまな俗入め
陣屋へ来いと云る手小手
戒められて清意が如何に
云得ますとても容赦慈悲
もあらんと武士引立て
ゆうんとする向かうら天
秤に蒸をかたげ
こる長高人が
かぐん烱渦と
陣屋で
呼ぶことなの
君が昨日
又
己が武分金を
一杯られ者いおでん
だりうへイく
今晩
いい
次へ

うきよ
ろ
の慈
姑いぼさに
汲ほさ
ぶ鍋の
ま
ぞうきん
さとのび
つく犬
うや尾
へ

※まあいゝ加減を
を知てある按摩
よやなうそ
宝地しみ
え白紙
ちらうと聞い
さそ云ゝ仮
のまも付ば
へイゝ加減
江戸の上
の独心親正院様と
中を壓きとて竹宝家
さる引らくまつて上使の

●酒と浪花の士の酒す
商人の面を清盛がそそ
ヤア安芸の次吉よの加減と
いわれて驚く商人い看板
の独史を嗤ふ清盛を●

●そるようや
半面の御院白楼
見ると行う事
と主士の木曽
次コレ又吉※

柄をとあるゝ絵と
書ぎ義経の
影お鬼され
と一緒ふ
此通の海
越て来て
友平にる
向する城
と佐みん
イヤ軍法書
どの今晩の
巡邏かん

名所細見 東京新圖
新形折本數品
皇國名物の繁る
色入小本數品
大日本皇國 物產のるた
徳川年代雙六
洋語加數多
大晦日盛裏双六
小形かるた數品
新形双六類品々
亀 地本錦繪問屋
淺草瓦町十二番地
島鮮堂 綱島亀吉

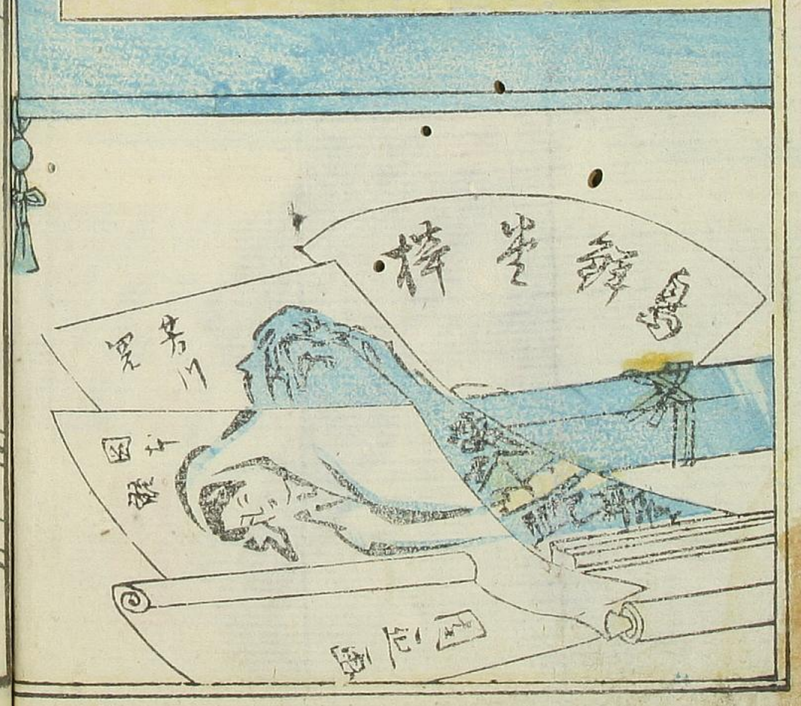
芳川春濤閣

岡本起泉綴

五編中

澤村田之助曙草紙

第五編



中の巻之

明日の仕迎の贅深を小室に倍あり身軽に出来ち あるを忘れしゆいあらねど折角死去
渦と肴を肩にかけ結しもきてつれぐなる安ぐんが番兵 をするといふを無法に断るもつまらぬと
小やに到りて見しく出入して然やまきまく大体の中へ 一杯二杯は置しからふと又吉を取巻き家一
お通り今日の戦争は皆損なかいか働きで流石にあふ も一杯我にもあまく頂でこれと通るを
城の大将大き主助も放ふを後しことの御結果お賜 ゆうこりと又吉が面白おかしく強つけなから
渦と私の親父が死で丁と二年なれば法じの出仙 壹の軍の模様など問ふ態をして親正院が
ことをして競進者を取変て持来しほしてゆゑ 居所を問へば番去当は辞に結是鉄が手柄
何年内を夏なく上つて下されと取度げられて。 結に取変て大事な囚人上船の場合は 次へ

●番ひ
等は兼て
隊長より
出書中は飲
食無用との命

つき 数ふ

投げ一二事あの禮金
おのれ一人繁昌がる時いかゞ木の模様
にする場を取るあるべきやうとおもひて
又吉ぶ絵く酒を飲つみて母を待つ暇で
寄り掛る態りして倒こるおまを左に
身を悲ばせ夜のあるを待ちもく
番兵等の姓苗明ふまいれ
て伺れも生ふ辞つ宜
筆の姿し

又吉と笑ふく

ふ有〜
絵

○もしおあひ掛ふく突交廿ふ参ふ立ち
戻りと云ひ仁八まゐと石松様をも
下へも置ぬ取ふ伝出し来〜清兵が
図通一張り部ち
其が出字息
衆の恩
どのが祝意

うとて
孔ふ綿び
居て笑い

ざし
胴巻
とス

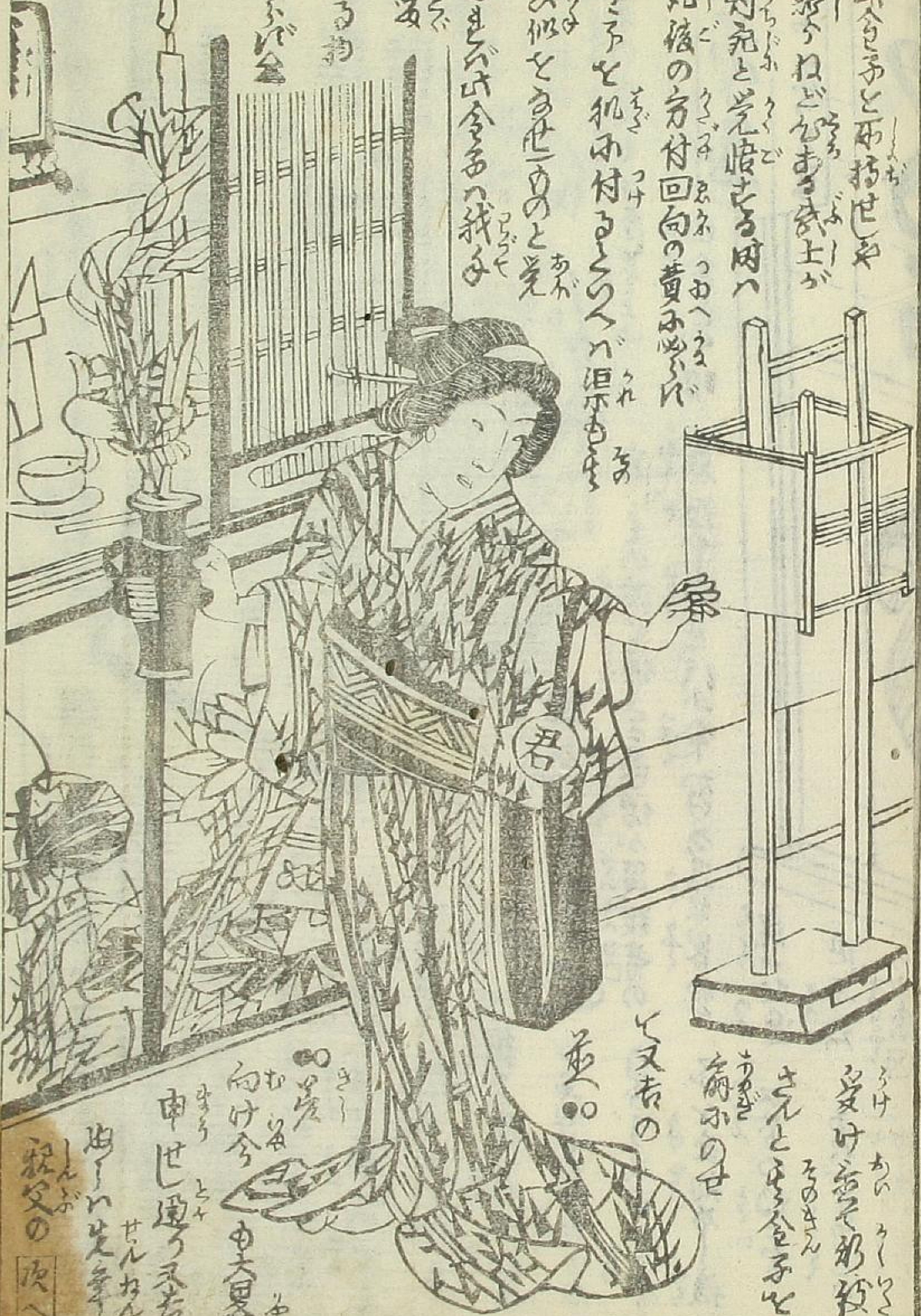
ふ

なも
付ず茶漬ふ体ふ為辞の舞の
ふ
数ふ又吉が計ふとも
来ふ門
ふる禮金ふ
ふ拘せ〜
配の事し
数金宜〜と指入而う断ふはて
禮金の残高を揺切ふ清念て救
ひ出〜我く足を踏あめて喜ぶもの
芸数ふ
続けて七型当の表ふ以来ふ来ふ而様
細ふる安村巫仁八方へ到ふせり

右ぶ
大身ひ通世」沢
陀の中ふふ紙ふ
包し
駄者を
足ふ
まを
ふ而上
げて仁八足
のき哀む又を
次へ

つゞき入ゟこんせうじど母のお常ハ旅の内
語べし浅茂一途ゟワッと泣伏す
と来縁者めと叱り
まなこも眼をあげ
だまれ仁八ハ
清念ゟ
れを述つゝ
手洞包を解き見るに中ゟハ金子五十両
と胴の帯包がありしまゝお常とお君ゟ
出付後と手柄の帯を佛檀へ供
へて香華を手向させ五十両の
金子を清念の前ゟ直に悴が如何
はして

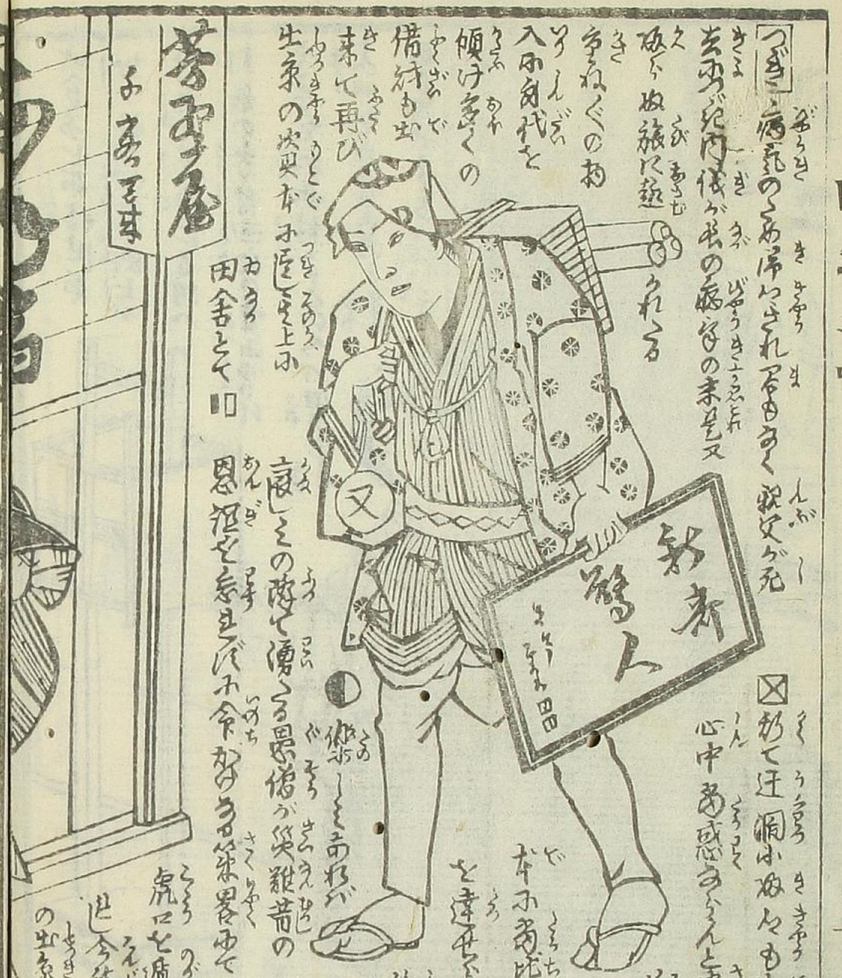
金郎ち時沙を勧めて直ま僧へ常せゟ進ずる
経ゟ商此後の冥ふくを祈りおるハ悴のぼだい
あだしと語る
を清念ハ
ひそと子
出家の
上と用
お紀太今
あづ一旦
云出れてあと
引き取きゑの
金貨放免
も悪僧が息を申し



此金子と取持せしや
し知らねども武士が
討死と覚悟せる內へ
死後の方付回向の費ゟ必れ
金子を机ゟ付るらへが涙もせ
真似を為せりのと覚
因もひ此金子の我子
ゟ毎
毎ふでし金
むる詞

受け取て形狀
きんと金子を
扇ゟのせ
と又吉の
並●○
●○向け今
申せし通り又吉
由夫卑
出し先拳
親父の

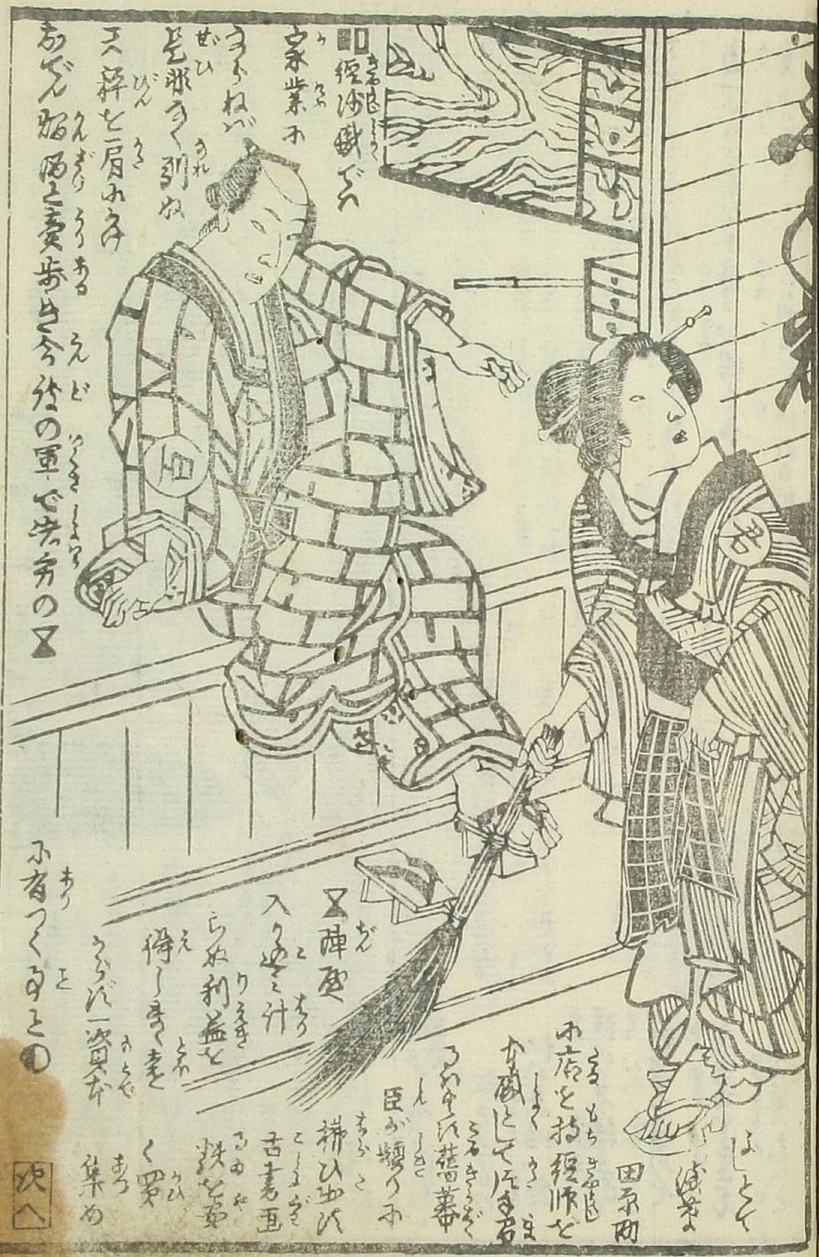
次へ



つぎ 病気のため帰りされ居ります 叔父が死去の知らせの来るを久しく取紛れ遅くなりましたれども 何卒御勘弁を願ひます 入用の金子を傾け多くの借財も出来て再び出京の次第なれども上ル

田舎より

◐ 扨〳〵あれが悪しき心中 勿論感ずるなんと事の出る故人舎を去り 僅か三月此八ツ割兼ての望みを達せられるとの仁八も 勝りと旨く勧めてやるまぎれ者 その うまうまと又吉いき今 子を丸納めし後 恩徳を忘れ悪心を 起して この陰で湧る悪僧が災難昔の 仇討の始末 鬼に七遍 化生の 此今結 あれが茅屋宅の 出来 ☒



◐ 御油断遊ばすな 家業も うろ〳〵致すと引ケ 三枠を二肩かけ あゞ腹減た喉渇く 夫迄の重荷 ☒ 神原 入るゝ汁 らん利益を 得しまを ふかつく ◐

ほとゝぎす 綾竹よ 田舎附 お店を お殿様 か風にて 江戸 臣が 掃ひ出し 古書画 秘蔵 く 集め

「さて」頃て菓子の折箱を抱て逢ふ二三名の職人を無理の身代に成し入籍の所に清念は又吉が家を訪と思もなく再び御立出で暫し待ちあらざりし然程に仁八夫婦は桑之丞は桑弱に背きし故此家の相続が出来ねばお君と夫婦にしてお家さ世ず宮座の家名を起させ我家は貞実なる西松に譲り相続くさすも当の事に及びしかども是非もなく納め

〇清念は再び此札を経回し帝や桑之丞が白骨を取納めまんしとて安納候

●立戻りおとぞ仁八夫婦は今更の事に涙に咽びながら暇乞し寺へ此葬をしく懇に弔ひし給ひぞお君は西松と共に仁八夫婦へ孝続のう清念を我家へ留めて菩提を弔らんと堅く言へど

清念は中々肯ず元々親なれど尽さぬ身を我とあやまちし時なれど今更指図に従ひし寛座にあらず天然乱取して住せ給ひ世を廻り面白しと又も行脚に出ん

偕の人西松とお君を夫婦となして近所へ家を持たせ番て折々ある終産を譲らばあへて親者を始めさせより菩提座と号しお君が実家を再興させしに春引継ぎ男子なるのもう夫婦中も睦まじくて折て男の児を挙けしかば仁八夫婦の喜び大方ならず是を桑之丞と呼び此児に我家を続せんとて直に其所に其の折を取極め睦しく往来して睦む事閑く暮すにつけお君は実父の墓つくし何卒夏へ引取て孝行を尽さんと思ふ心なれば西松も同様にて日ごとに実の両親夫婦が折も安楽に暮す上は元の田地の行衛を尋ねさせんと思へ何地に在るやらと幸頃の折もよく▲とするを

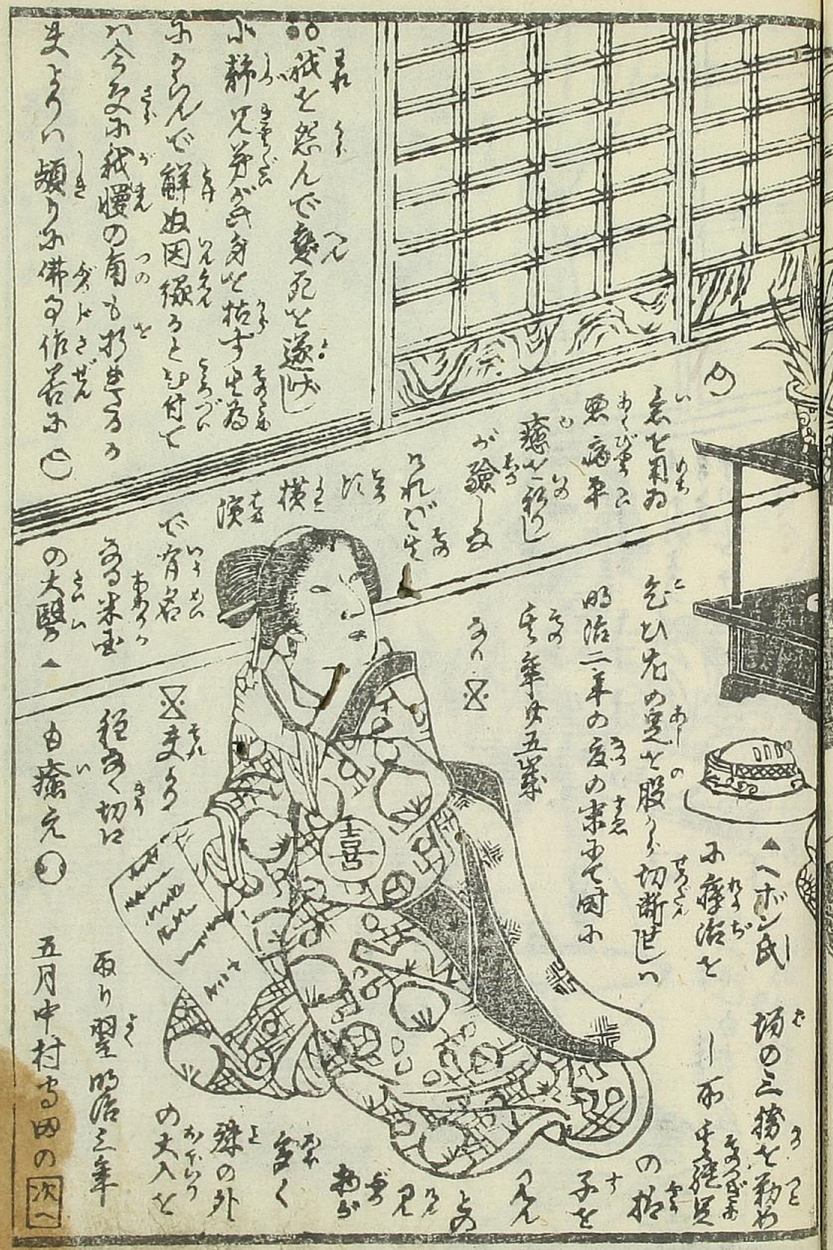
つゞく

図まとそせごと多ふ如論ゑく
見い為く腕爾ゑこ流
ゑ暖の奥手に
据へられぬわど
ゑわバ流石
ゑ笑も意
もゑめ果
しゑ珊瑚
珠の
ゑこて
ゑ雛緑
と

一図ゆそもる
ゑく足と為るこゐ
ゑり」が俗家へ帰ゐ
ゑ腰ゑんとふ物のやゐ
清らゐ着実と考ゑく
衣ゐ作の世百松夫婦へ至るく
ゐゐうひてんどうれど清奈
い七人々の追福と使ゑるの
陳ゐの瓢箪と絆を乱して
五日も十日も隔う来ぬと
頓云せご世塵の外ゐ月と
○叔父田之助い望の把とのゐゐ
桜の小幕が著と実に
とせしゐ自ごらん
一愛ゑる外い
田の助い為
情者と
ゐつけ
過来
一宇と
勧
ご

いづき　その
のちあま後深く箱
ひと一志女
寿おき
和七姫
そのさき花里
人の女の
ぎょうえん
定紋が伝
れ由来のや
ありしい。

きりょく
すをめしえ
傷ひとの
ゴム紙
の絵を
と良
く間違
の絵字
四条
あっちん
虫動し病気
会陰の山私私
ガンと拡張し
こ指ぎ七の線切



それを怨んで変死を遂げ
小静兄弟が身を拉す也
ふらんで解由因縁ることも付て
いま今の小我慢の角もおもろう
笑ろうに頼りの佛の作若ふ。

忘七月お
悪病平
癒七行り
お験しお

横
演

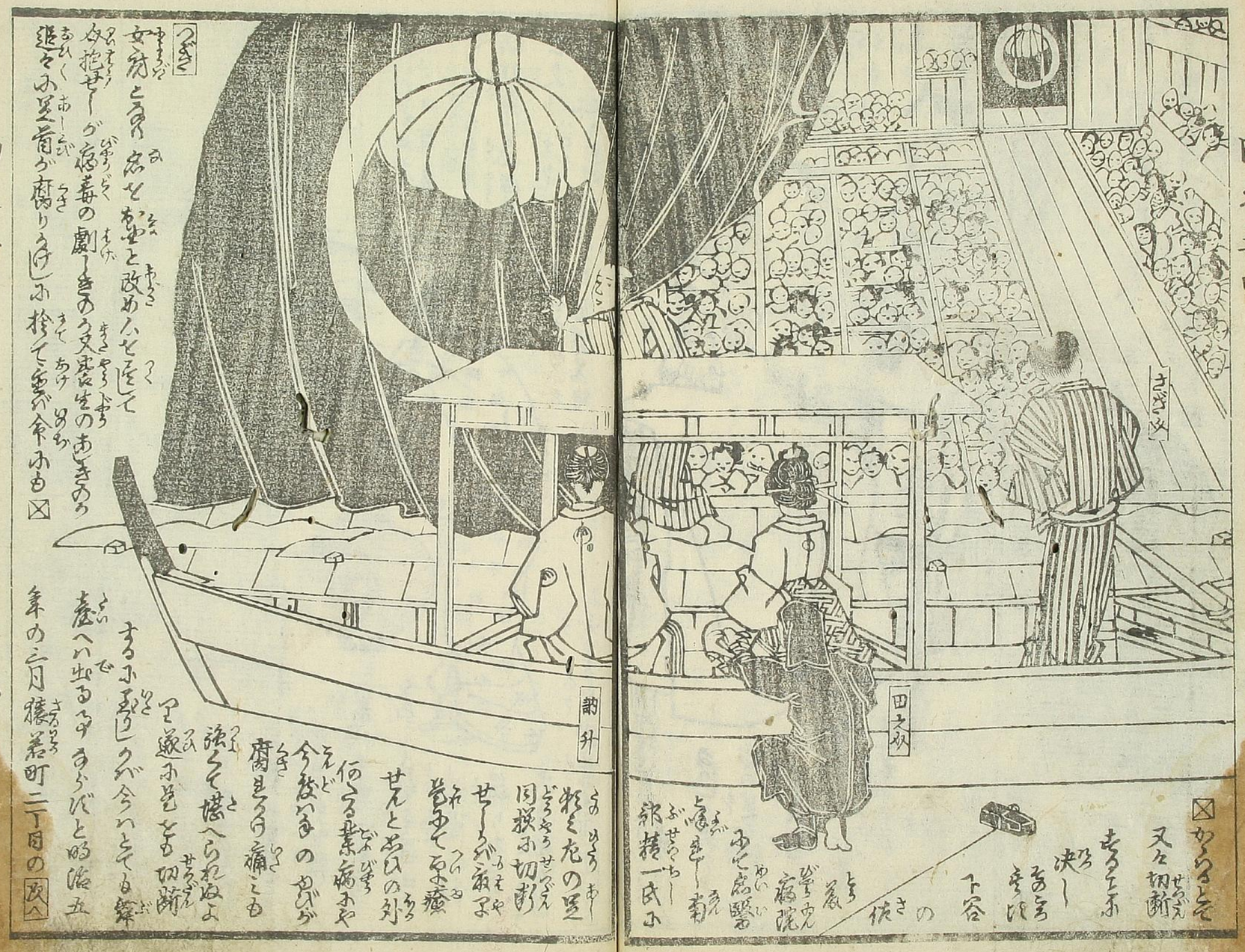
それぞれ

▲ヘボン氏
療治を
一本生絶足

切の二指七動わ
明治二年の変七股ゝ切断世ゝ
その年女五歳
の者
子を
とあ

取り翌暦二年
の大厄
白癜元

田之五中


つぎ
女房とあり名を重と改めんを遂て
女抱せしが病毒の劇しきのう又器生のあしきのう
追々に足首が腐りうけしに捨て重が命にも
さざ女
田之奴
訥升

名所細見 東京新圖

皇國名物の蒐て

大日本皇國 物產のるた

洋語加數多

小形加るた 數品

新形折本數品

色入小本數品

徳川年代雙六

大晦日盛衰双六

新形双六類品々

地本錦繪問屋

淺草瓦町十二番地

島鮮堂 綱島亀吉

揚洲周延畫
嶌鮮堂壽梓

さらわ
むらに
たのきぞの
あけ
ぞの
さらし
五角ん
下の
まのき

中のりつぎ

つゞき

一幕を処へ其の藝者を田之助が勤め客を
納升紀四を中村駿雪助（今の博丸年）が勤め
此時納升の一子源平が初舞臺を
勤む叔此程去に田之助の藝婦が
長女を受け候も去るがら同分の
愁嘆を不世僅か一通の教にて多く
の見物を泣せ仕方にて感ぜぬ
去とてまつりしと勢ひ非常の
大入まつりしが其後は
出勤
もせざ
望し放り
同社も思ひしく

☒の此奉
の四月より

素昌せず遂にハ
他人のまに入るる
にまつり ☒

家橘

婦ハ近頃紀州家業の隙
に成り出しこと安身居仁八ハ
都合により縁て田地をも
買求め至し利根川縁宮
下今井村へ引込むに付
田舎住居の方が却て宮下
であらんと共に同夏引移り
に同所ハ漁業に都合もよく
て西松夫婦ハ以前より結句
安に未に宮に居るとはまつりぬ
叔又田之助の女房お玉ハ 次へ

つゞき

此年一子を設く是
即ち現今不及を勅
めなる沢村由比弟にて
兼て田之助が告不と
はしる沢村百之助は藝も
可なりにませど未だ告父母を
喜ふまでに至らず又兄の
納升宝祝親族分にて
も長の月日の内にハ行届
う及講合もあれば諸ゐ先ならずにてありし ☒

◈ 福助
荒五郎等
の ☒

☒ 一往
にて
奥行
せし物云
名頭は
（十二時
義士の廻
文）にて
田の姿は
彼の沢村
雅にて ▯

▯ 演
ぜし船
粧敷の御色
用ゐて此月見得に上と

☒ 新しも大坂通
飛城の中の芝居から

當
きまん

今ハ給金にて田之
助の出勤
を ◐

◐ 粧をに床
を音ひ不速に承
知りて坂東家橋と
は家十郎の粧
客を
相る
方に
自分
が藝
妓と

▲下ヘ
共に彼地へ下り
日錢無過しい

▲上ヘ
浦里を勅めしに坂地姑めての出勤と云 ▲次ヘ
切粧
云の
時焉の

浩八年
明
の七月にて逝
に盃祭りの粧
云

中村宗十郎

に出勤し宗十郎九花 ◈

市川九藏

つぎ

不具にて評判なき奈糸
俄優の陸一なる田之助
なれば同府下市中は
いふも更なり近郷近在
から我もくと押かけ堺筋
長所辺に者を取てゐ相する

市川荒五郎

◐宮浦里の禿
を勤める役
なりしに僅
か三日に
て病気の
ゑあり引し放
事代りを
外の
不役
ホ☒

中村福助

老きえ良
かりしかば

初日より
五日目に在や
蛇蝎も上る程
の大糸乱成し和
不図しくなりから此対の
経験なる中村宗十郎
と不和を
醸しより
抑手仔細を尋ねると
宗十郎の一不仙丸が◐

坂東家橘

坂東善次

☒いひ
付意に
仕新を
変へたり
何うする
うたく

次へ

つゞき
四日目の朝が飾り遅く起しと宗十郎が知らし五日目ゆゑそく幕明をせきそて急ぎゆゑで田の助が例の病癖に陰りしがえで其日は舞台へ出ぬとゆゑ荒又郎が口を利く一同裾の[illegible]くるが田の助は何か

△今後の事は宗十郎が非ありと一趣の重立し俳優五六名と己に田之助に[illegible]し[illegible]の料理屋へ寄合して互ひに契約を結び田之助の[illegible]をせしが流石の宗十郎も身を[illegible]し[illegible]遂に舞台を引く事に[illegible]例の[illegible]俳優を[illegible]業して[illegible]の

接が懇ゆとまえを後宗十郎と面を会せる毎に[illegible]の文句を[illegible]の中へ出て[illegible]まどせしより遂に確執と▲

▲[illegible]丸[illegible]宗十郎に恨を[illegible]

[illegible]菱井重兵衛を[illegible]一の商人と[illegible]田の[illegible]二代目田の助の[illegible]の[illegible]が宗十郎[illegible]田の助の[illegible]を十[illegible]するは[illegible]とを仲裁に入る[illegible]再び[illegible]するるにまりて田の[illegible]の舟[illegible]即ち[illegible]川の清姫と国[illegible]の[illegible]を勤め 次へ

四

五

つぎ 此内甘鮮は家十年
和義内は家橋なりし
附ていふ田の助がま足を
変ひしより鉢蔵へ当る
毎にハ必らず弟子の絶に
年と市川三筋
が丸で人形をひ
同様に後見を
は居たるが
右の清雅の
人形慧にハ
同様で首名
なる人形をひ

中村福助

◐なまゆるもなく淡栄
田南和東村冥士下の
宅にありしが
のゐめ弟に
衰弱して▲

▲明治
十一年
にいたり
夜半重

恭を拓ぶて
法事指南を
受け家十年
丸蔵
家橋
福女
鯱

中村宗十郎

十年等が人形
をひに扮装ち
田の助の身体を
中にまくて本作りのま
足を坐込まれば其の活人形ともいへ
して一入見ものなりしと依て此程云ハ殊の外☒

☒系字よく
打上げ直に来系
取りさ後ハいかに◐

仲とりんなり
しに田の典
当程云の事
のを知がたり
今度会映
して市川
家の勤
進帳に
擬する女勤
進帳といふ
を脚色を
奥行して見
てしと つぎ

つゞき

訥升

相政

百之助

つぎ

雪送葬の見るであり已を渡るを以て
お常は又のやむひ出しまに付ても不便なるは
悴案を並れ世の為といひ世家に行倒れ
因縁の死様をしてと鼻をさしるを清気が
押止めヤヨ内儀さまぞ嘆きなふなれも如何は
因あり果あり田之助が如きは家業柄とは
いへ父慾の為に多くの人を悩ませてゐる
報ひにも世に例なき業病に数年当
身を苦しめしを見れば葬式の美なるが
如きは雪雖陰を除くに足らず又世人の
内には四の助が業病は思慮が死果の
祟りなどいへど絨は帰りて彼を怒まず
現に死して居るを以て左様な浮にあらず
はして

◐ 好安楽に業へあると邪
急深き小静母子ぞ夜明
を保まれる為を考へ且ば
因果の為程は明らか
なれば仁八度ゆき
夜が夜半の一子を非業
に失なる是は先に
奥究の上といひ
天理と人情に
戻りて現在の子
を思慮に奏
渡ひ居

▲ 桑之丞が非
命は乱世の
子といふなるべし

田之助
葬式の
体

◐ 下が

雪三七日に
当る四月七日に
岩吉が途中で悩相に
あふと乱殺し夫が元で同く
十七日に妹な死ぬるを以て雪翌
年小静さんの祥月命日 次へ

呂彼等が乱で身を逃しと知る
へし今孝子の面松真
実なるお君が報
雖年苦の
末 ◐

一は苟しくも師とせし
思慮が罪を発き失ふ
繼世罪を天より罰せら是しかも
あらんまに付ても人なる者は苦痕を僅
せざれば安楽を保つを能はず何れも合点事なり
やと現示されて一同が実に自と感じて止ざる中に
又吉が賢ら立ち夫に付ても因縁は争はれぬ
ものにて此後猿若町の者に愛しを考へると小静さん
の没なられたは愛恵二年の三月十七日で

◐ 上へ

つぎ 三月十七日に雪名も似ようのお都と
いふ後をして田之助が是の生れを剥し
まが那の病学の始りで今安
れんざ月が七月の七日と初も
七の字が附纏ふのさへ不及
儀のうへに小都さんが怒んで
長さ志女奢も
三月是の病乳
で殿是にあつこと
遣が何と身の毛が弥 生粕
学味の強い活でいあつませ
ねうと呼て何れも懍
と遣互ひに面を見合す

▲彼の
因縁とい
熱るを

☒ あるが清氣
は明治十二年
の三月に
梅の
尾宮
にて
大往
生を
遂ふ
卒
二案

を清念のまい嘲笑ひ陳数
れぐりまがらソハ時の
廻り合せと云わ
まて
一同を諭したりとぞ
生後半年程過ぎ又吉い報合
によりて再び放ぬへ引迎え
安射益芳飛屋のあ
裏は一同変り ☒

いふにあらずと尚
ありしと扱
又田の仮
が ◎

◎左世中の畏恵も
深山ありしが其のひいきと云
は彼の林田の有るやにて
田之助が復後も生送
族を取仕切て伝切に 次へ

つぎ 世話を以て既に生お蔭を以て後家のお国の
尚ほ尚ほ出世を門に紀の国屋と以て業屋を
出しあり此又是も不浅迄も紀の今の
成行を畧と紀せば柳橋の大きいを
後藤倍家之抱家山野の女房と
なり志女寿は一時吉原の稽本橋の
隠居が妻となりしも今は再び志女と名のりて
相撲かぶ寄席稼を以て渉る雲天町に住居し
お寿和は神田明神坂の今貸渡世渡辺勘兵衛一名
○一寸此所で小吹碓中上手又は高鮮堂が需めに應じ
兼て東京新聞にて以後判に形りし毒婦お竹が来歴を
幻阿竹噂聞書と題し三編読切の古今無類
面白き冊子に綴り引ひき出板仕り申れば高繞の紙を形ひ来

▲アメリカ勧
会迷が
女房に
なりしと
いつがまにく
紀し遊び
大いに婦女子
を戒しむる種とも
なかんと云
に筆をさしあくあるしと

御届 明治十三年十月十一日
浅草区瓦丁十二番地
出板人 綱島亀吉

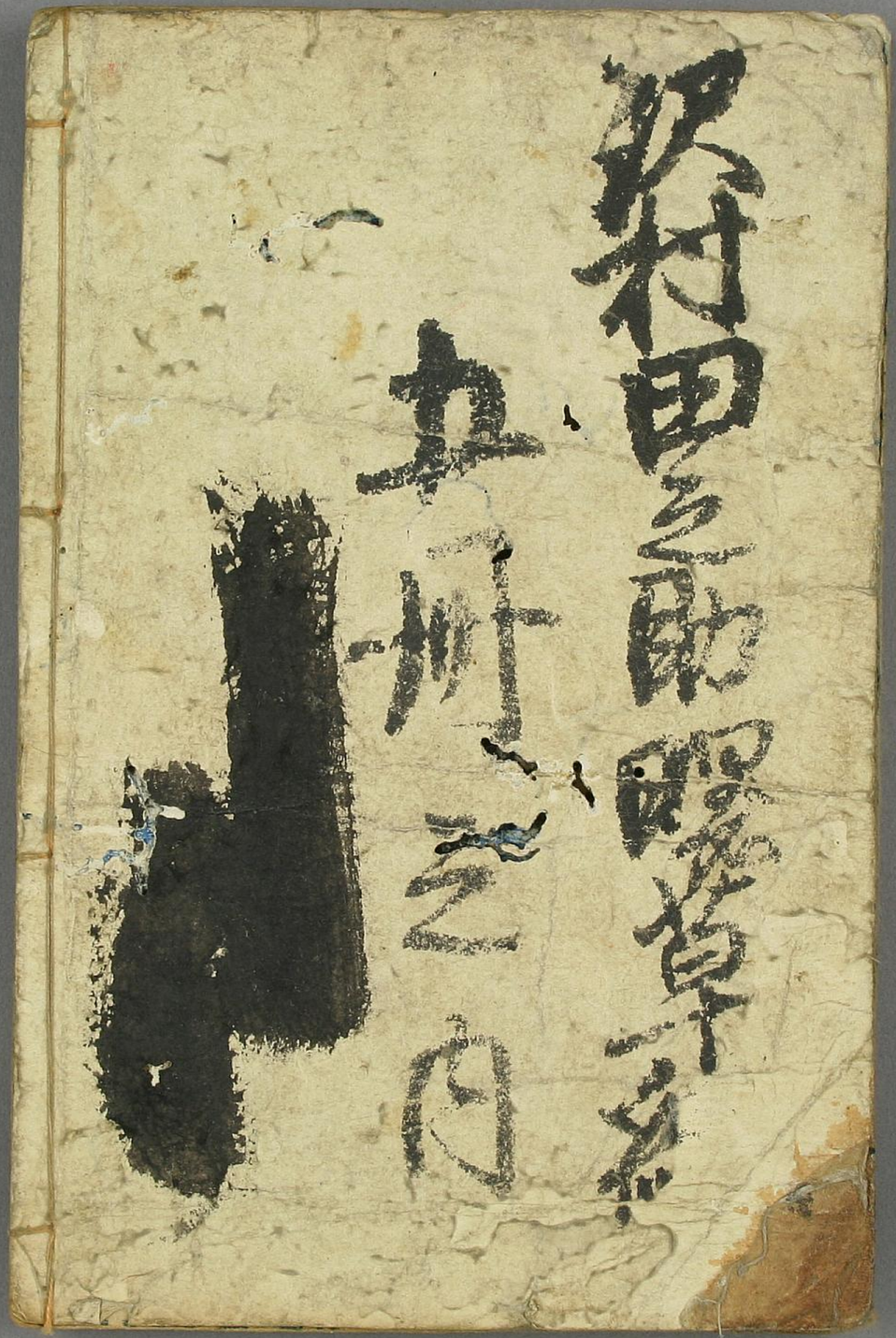
芳川春濤閲 岡本起泉作

幻阿竹噂聞書 三編
川上行義復讎新話 二編
澤村田之助曙草紙 五編
坂東彦三俊一流 三編
白菖阿繁顛末 三編
島田一郎梅雨日記 五編
其名高橋毒婦小傳 七編

御所櫻梅松録 十五編
名所細見 東京新圖
武者切附本 品々
新形折本 品々
石摺略暦 品々

作者 岡本勘造
紺町区一番町六十一番地
浅草瓦町十二番地
板主 綱島亀吉

010190517131



野村田之助曙草紙

丑一州之内